

ミツカン水の文化フォーラム 2014 を開催しました

水都ルネッサンス 「これからの水都像とコミュニティデザイン」を考える



【テーマ】
これからつくるべき・残すべき
『水都』の魅力を生み、残すべくとは？
・「水都資産」から考える。

かつて暮らしや憩いの場、交通手段として活かされていた都市の水辺は、高度成長期にいったん姿を消し、市民から遠く離れてしまいました。しかし今ふたたび、水辺の復活・再生を目指す人々のネットワークやコミュニティの活動が盛んになり、インフラも整備され、賑わいを取り戻そうとしています。魅力ある「水都」の再生には、どのような取り組みが求められるのでしょうか。そこで、ミツカン水の文化フォーラム2014では「水都ルネッサンス——『これからの水都像とコミュニティデザイン』を考える」と題して、建築史家の陣内秀信さん、コミュニティデザイナーの山崎亮さん、地域政策研究者の中庭光彦さんをお招きし、「水都」の再生に向けての方策やヒントを探りました。



陣内 秀信 さん
じんない ひでのぶ
法政大学デザイン工学部
建築学科教授



山崎 亮 さん
やまざきりょう
studio-L 代表
東北芸術工科大学教授
京都造形芸術大学教授
慶應義塾大学特別招聘教授



中庭 光彦 さん
なかにわ みつひこ
多摩大学経営情報学部
経営情報学科准教授
多摩大学総合研究所副所長

講演 1 陣内秀信さん

水辺を元気な都市空間に ——歴史、暮らし、文化、経済の視点から

講演 2 山崎亮さん

水辺のコミュニティデザイン

討論 陣内秀信さん×山崎亮さん(コーディネーター 中庭光彦さん)

これからつくるべき・残すべき 『水都』という仕組みとは

最初に登壇した陣内さんは、イタリアで広がりつつあるアグリトゥリズムの漁業版「ベスカトゥリズム」や水辺をクリエイティブな文化産業とするノルウェーのオスロの取り組みなど国内外の水辺の取り組みを紹介。「日本には欧米にはない遊び心の水辺文化があった」と指摘し、水辺にかつてあった庶民のエネルギーを取り戻すことが必要と話しました。

参加型のまちづくりを各地で進める山崎さんは「水辺に無関心な人をどう振り向かせるか」という観点から講演。自身がかかわった「瀬戸内しまのわ2014」の狼煙リレーをはじめとするコミュニティデザインの実例を上げながら、人々を「その気にさせる」巻き込み方について説明しました。

その後、中庭さんを加えたお三方が「水都」の仕組みをディスカッション。「地縁よりも、これからは興味でつながるコミュニティが水辺を使いこなす取り組みにつながる」（陣内さん）、「水辺でそんなことをしてもいいんだ、と思わせる『思いもよらない使いこなし』が大事」（山崎さん）といった意見が交わされました。

ぜひ当センターのホームページから詳細をご覧ください。

日時：2014年11月20日(木) 13:30～17:00

会場：ワテラスコモンホール(東京都千代田区)

来場者数：120人

水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今後の企画についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

日本の水文化調査報告（2014年度）

滞日アジア留学生がもつ 日本の水魅力イメージ

日本人にとって水は身近な存在です。そして、日本のもつ水の清潔なイメージや水道インフラは世界レベルで優位性があるものだと日本人は思っているかもしれません。では、実際に海外の人々は日本の水文化をどのように認識しているのでしょうか。滞日中の東アジア・東南アジアからの留学生200人に聞いてみました。詳細はホームページからご覧ください。

編集後記

取材を重ねるにつれ、今までの「養殖」への認識がいかにいい加減だったのかわかった企画でした。品質や技術向上の一方で、餌代等の高騰が経営を圧迫している現状も知ることになりました。その価値を知り、美味しく魚をいただきたいと思っています。（後）

漁船に乗り込み養殖現場をみせて頂いたり、何種類ものブリを食べ比べたり、釣りもやらない私にとっては今回も新鮮な取材ばかり。その中で様々な「養殖にしかない価値」を感じる事ができました。読者の皆さまの養殖に対する見方を、少しでも変えられたら、嬉しいですね。（亜）

養殖にたくさんの方の種類の種類や、こんな創意工夫があることを初めて知った。今、魚介類は値段が高いイメージがある。更なる改良を進めて、ぜひ養殖魚には、安定供給出来る利点を活かして、価格から来る魚食離れを食い止める存在になってほしい。（原）

天然と養殖。今までは相反する言葉として捉えていた。しかし、この号を通して、共存することができるものではないかと思うようになった。イメージを払拭するのは容易ではないが、それぞれの良さを知って、スーパーで手に取る日も近いのではなからうか。（吉）

生魚が苦手な自分にとって、食べ比べ体験は少し大変な思いをしましたが、最後に試食した「湯煮」という食べ方には驚きです。魚の味はするのにくさみだけが消えている。味に対する生産現場への要望ばかり高いが、食べる側にも工夫が必要なのだと感じました。（力）

今号から編集を担当することになりました。歴史があり根強いファンも多い『水の文化』をどう展開していくのか、かなり悩みましたし、これからも試行錯誤すると思えます。ぜひ誌面のリニューアルに関するご意見、ご感想をお寄せください。よろしくお願いたします。（前）

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第49号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル 4F

株式会社 Mizkan Holdings

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-11-3 中銀 NM・5F

Tel. 03 (6264) 9471 Fax. 03 (6685) 7596

発行日

2015年（平成27）2月

企画協力 （氏名50音順）

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学教授

鳥越皓之 早稲田大学教授

中庭光彦 多摩大学准教授

制作

後藤喜晃

佐伯亜友美

原田朱野

吉田奈保子

編集製作

前川太郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

執筆

奥島俊輔 (pp.6-9, pp.14-17)

手塚ひとみ (pp.22-32)

前川太郎 (pp.18-21, pp.36-37)

安田博勇 (pp.10-13)

撮影

大平正美 (pp.14-17)

川本聖哉 (pp.18-21, pp.22-25, pp.36-37)

篠田 勇 (pp.26-29)

中野公力 (pp.44-49)

藤牧徹也 (pp.4-9, pp.10-13, p.17,

pp.30-32, pp.38-43, p.50)

印刷

中埜総合印刷株式会社